

仏さまの世界へ誘う

今昔

ものがたり

抄

末本弘然

## 目次

はじめに	6
第一章 「とにかく生きていくのはつらい!」	
《男女の悲哀の物語》	
人生を翻弄され続けた姫君の最期は？	10
幽霊となって夫の帰りを待ち続けた妻	15
出世した元妻と再会した男は？	19
《一途に、そしてたたかに生きた女性たち》	
一度決めたら、死んでも思いを遂げます！	23
生活のために魚売りの婆さんがしていたこと	27
《大丈夫か!? 男たち》	
表と裏では大違い、お粗末な内なる心	30
これでは食べ物有り難さがわからない	34
妖術の魔力に魅せられて……	38
自己の危機管理が問われます？	42
死体置き場となった羅城門での出来事	92
《仏さまのものを横取りする罪》	
エリート僧が御布施を自分のものに……	96
自分たちだけがいい目におおうとすると……	100
《妬み嫉み腹立ち、死ぬまで消えず絶えず……》	
目の上のたんこぶは取り除きたい!?	105
ライバルの活躍に自尊心が傷つけられて	109
第三章 「持ちっ持たれっ、思いやりの精神」	
《思わぬ助け舟が現れて》	
人びとの温かな心が網の目のように伝わる	114
極楽往生の願いを皆の力で果たした聖人	119
生贄の悪習を絶ちたいけれど……	123
《恩に報いる行為が実を結ぶ》	
親切心で行った隣家の男の善意とは	127
小さないのちを助けたおかげで……	131
《可愛い我が子だったのに……》	
優しい我が子の思いが通じなかった悲劇	47
母と子のどちらを救うか、選択を迫られたら	52
《老いの侘しさ、されど……》	
この家で死なれたら困ります！	56
老いた叔母を憎む妻に、つい心が動いて	59
第二章 「人間って、怖い生き物ですね」	
《善悪の見境がつかなくなって、殺めてしまった!》	
日頃の悪業が身に沁みついていた!	64
母を殺める者がおれば、父を殺める者もいる	68
どんな不肖な子でも助けたいのが母親	72
保身のために、忠実な部下を殺した上司	76
《他人のものを奪い取る罪》	
立場を利用して私腹を肥やす守	80
生きるか死ぬか、体を張って生きてます!	84
大盗賊も齒が立たない豪傑貴族がいた!	88
人間の為にいのちがけで雨を降らした龍	135
人間にとり憑いた狐の恩返し	139
《心と心が通い合いました!》	
自然の趣を感じ合った琵琶の名手	143
逃げれば父は倒れてしまう	147
蜂と人間の共生関係も成り立つんです	151
他人の魂が自分の体に入って生じたこと	156
第四章 「もう一つの人生の選択——出家の道」	
《このままでは生きていけない!》	
愛別離苦から出発する新たな人生	162
人間だけが生きているのではなかった	165
心を翻して仏道を歩めば極楽往生が叶う	169
《一途に行を続けていると……》	
鉢を飛ばして食を得る聖人	173
念仏を唱え続けて極楽往生した在俗の僧	177
わが身に虹の卵を産ませ、孵化させた修行僧	180

《全うする》とは難しい！》

愛欲の煩惱を起こし放り出された僧	183
女性の修行者も、成就するのは難しかった	187
一度失った能力をまた復活させて	191

《心得違いをしていました》

極楽に往生するためには何が必要？	195
息子が名僧になることを望まなかった母	200
邪心を転じて仏道に向かわされた僧	205

第五章 「世界は今よりずっと広がった！」

《人間を取り巻く奇怪な“生き物”たち》

夜中に葬った死人が動き出した！	212
巧妙な詐欺に騙されないように……	216
透明人間にされてしまった男	220
《こんな有り難い動物たちもいます》	
人間の赤子を育てた風格ある白い犬	224
有り難かった亀の行爲	228

《どの世界でも生きるのは大変です》

小さな虫たちの必死の戦い	232
油断すると命を落としかねないこの世界	236
淑やかさに秘められた女性の力	240

第六章 「大いなるはたらきに遇う」

《いのちの危機を救った観音さま》

仏師の身代わりとなって二人とも救う	246
自らの御身を与えて修行者の飢えを助ける	250
観音さまを最後の依りどころとした男	254

《仏さまの声が聞こえてきた》

仏像になるはずの木が踏みつけられて	258
盗まれて壊されかけた仏さまが叫んだ！	262
《お経に込められた仏さまの功德》	
経巻が食べ物となって僧を元気づける	266
京のど真ん中でナンパした美女の正体は？	270
おかげで非日常の恐怖から戻れました！	274

《悪人を極楽浄土に救い摂る》

悪人の自分が救われると信じて西方へ	278
地獄の火車から金色の蓮花に……	282

特別編 その1

仏さまが自ら示された人の情	286
特別編 その2	
夜には仏さまが鳩摩羅焰を背負われて	289

《凡例》

☆本書の基本参考図書(底本)は「新 日本古典文学大系『今昔物語集』三、四、五巻」(岩波書店刊)で、但し最後の二話は「『今昔物語集』(三)(六)」(講談社学術文庫)を用いた。

☆校本として、古典籍の写本である「鈴鹿本」(京都大学図書館蔵)と「黒川本」(実践女子大学所蔵)を用い、一部、「小山文庫」(九州大学図書館蔵)も閲覧して、底本の文を確認した。

☆抄出した六十八の説話は、『今昔物語集』の編成順ではなく、仏教的視点から独自に立てたテーマに合わせて並べ変えている。

☆各説話の現代語訳(本文)については、基本的に文の内容を尊重しながら、著者の解釈によって話の要点が明確になるように心がけ、さらにテーマに沿うかたちで大幅に短縮しているものも少なくない。

☆本文の表現は、できるだけ現代に通用する言葉を使うように心がけたが、当時特有の用語(旧国名、郡名、人物名、官職など)については、その表現を尊重した。

☆本文の現代語訳でも、意味がわかりにくい言葉や表現については、脚註を設けて説明した。

## はじめに

日本人は、人を思いやる心、お互いを助け合う心、また、自然を敬うと同時に、その自然の中でもに生きるあらゆるいのちにも、同じ仲間として、時には恐れ、時には親しみの心を持って、長年暮らしてきました。それらの心が培われた背景には、千四百年前の飛鳥時代に聖徳太子が、日本人の精神的支柱として取り入れられた仏教が大きく関わっていることは間違いないところでしよう。

それが近代に入って、西洋の合理主義思想を元とする政治・経済・文化・科学の導入と浸透によって、いわゆる欧米化が進み、日本人の心の有り様も大きく変わってきました。特に現代は、その日本人の心情が根底から崩壊しかねない状況になってきているように感じています。すなわち、競争と対立の基本構図の中で、自己の能力を発揮し高めることが大切にされ、勝ち抜くための努力が称讃され、具体的な形としての成果や栄誉や名声が重んじられて、人の値打ちが数量化・階層化され、ランク付けされてきているのです。

一方で、ここ数年来、温暖化に伴う急激な気象変動や、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行（パンデミック）などを契機に、これまでの成果主義、人間中心の我欲追求型社会が人類自身を窮地に追い込み、地球規模の環境破壊をもたらしていることによりやぐりづきはじめているのも事実でしょう。

それと時を同じくして、聖徳太子没後千四百年忌にあたる二〇二一年、太子の表された「和を以って貴しと為す」の精神が再び注目され、受け継がれてきた日本人のところが見直されはじめている気がしています。

そのところをより明白に呼び覚ましていただくための一助としてご紹介したいのが、仏教的視点から数々の説話を集めた『今昔物語集』です。

『今昔物語集』は、十二世紀前半の院政期に編纂された全三十一巻・一千話を超える一大説話集です。この院政期は現代と同様、社会が大きく変わろうとしていた時代でした。仏教もまた、貴族ら一部の階層の人たちだけのものから、京に住む庶民をはじめ、聖ひじりといわれる特定の寺院に属さない僧たちの活躍などで地方へも広がり、法然聖人や親鸞聖人らのいわゆる鎌倉新仏教へとつながっていく、仏教の社会浸透化が進んだ時代でした。

『今昔物語集』に収められている説話には、虐待、引きこもり、ハラスメント、孤独死、食品偽装、欺瞞、詐欺、メタボリックシンドローム……と、現代にも通じるさまざまな問題や現象が取り上げられ、実にリアルに語られています。これを読むことで、さまざまな

苦悩や不安を抱えながら生きていた当時の人びとの息遣いが時空を超えて伝わってきます。そしてそれは過去の出来事としてだけでなく、現代に生きる私たちの胸にも切なく迫ってくるはずです。

さらに言えることは、大変な苦悩の中でも当時の人びとには、絶望だけではなく、安堵の世界が必ず存在していたのでした。端的に申せば、それが仏さまの世界だったのです。その仏の世界へ誘うのが本書のいわば目標でもあります。そこを感じてもらえれば、こんな有り難いことはありません。

なお、本書刊行にあたり、『今昔物語集』への関心に導いてくださった恩師、故・野々村智剣先生、執筆の緒を作ってくださった月刊誌『御堂さん』、それに編集の労を取ってくださった本願寺出版社の皆さまに感謝申し上げます。

二〇二二年七月一日

末本 弘然

## 第一章 「とかく生きていくのはつらい!？」

## 人生を翻弄され続けた姫君の最期は？

人は誰でも「私って、なんてついていないのだろう」と自分の人生を嘆くことがあります。いつの時代でも、人が生きていくのは大変です。仕事に、結婚に、家庭に、夢と希望は持つものの、思い通りに運ぶことはむしろ稀なことといってよいでしょう。そして、そういう自分もやがて老い、病となり、死んでいくのです。思うようにならないのが人生。そういう人生の酷さと悲哀を表した話から始めましょう。

### 六宮ろくのみやの姫君の夫出家する語こと

(巻十九・第五)

今は昔、六宮の宮家に、人付き合いもせず時代に取り残されたような五十過ぎの宮さまがいた。宮さまには娘が一人いた。容姿端麗で心根の優しい、十歳を超えたばかりのかわいい姫君だった。その美しさは申し分なく、どんな高貴な身分の若君がお相手でも、けっして引けを取らなかつただろう。しかし、人との付き

宮さま 正確には六宮といわれた親王、あるいは王の息子をさすが、ここではその息子もあえて宮さまと表現した。

合いがないため、姫君の存在は世間に知られることなく、求婚する若者もいなかった。父親も、姫は慎み深くあるべきとの昔ながらの考えだつたため、こちらから縁談を持ちかけることはなかつた。

父も母も精いっぱい愛情を注いで育てた。しかしそれはまた、姫君が心から打ち解け頼りにできる人が両親以外になかつたともいえる。年行く父と母は、それが気がかりだつた。

そんな家族に悲劇が訪れる。父と母が相次いで亡くなってしまったのだ。ただ一人残された姫君は、悲しみに明け暮れる日々を送ることになる。世話役の乳母めのとは、邸内の由緒ある調度品や使い慣れた家具などを売って生活の糧にするのだが、それも底を突くほどに乏しくなつていった。環境の激変に、姫君は心細く、目に見えて生氣を失つていった。

見るに見かねて、乳母が若者を引き合わせた。受領ずりょうの息子だつた。姫君は不安と恥じらいで拒否するが、若者はすっかり気に入る。姫君の元に通い始める。姫君も頼れる人がいないため、若者に身をゆだねる以外に生きる道はなかつた。

そう覚悟を決めた矢先のこと、若者は父の赴任に合せて陸奥国むつくにに同行しなけ

乳母 一般に生母にかわって、その子に乳を飲ませ、育てる女性だが、子が成長する過程で、身の回りの世話やしつけ等の養育を任せられたりした。

受領 任国に赴いて実務にあたる地方長官。

陸奥国 現在の東北地方。青森、岩手、宮城、福島県にあたる地域。



ればならなくなった。姫君との別れがすらく思い悩むが、父には逆らえない。

「必ず帰ってくるから、待っていておくれ」

——固く約束して出かけたのだった。

ところが、陸奥は遠い国。姫君への手紙を届けてくれる人が見つからず、消息不明のまま四、五年が経ってしまふ。ようやく父の任期が終わり帰れると思ったところに、常陸国ひたちものくにの守かみから「娘の婿に」との話があり、父親は承諾してしまったため、それからさらに三、四年常陸に留まることになった。結局、旅立つてから京に帰るまでに、足かけ九年の歳月が流れていた。

ようやく京に戻った男は居ても立ってもおられず、旅姿のまま六宮に駆けつけた。しかしそこで男が見たのは、変わり果てた宮家の邸跡だった。土塀は崩れ、寢殿や姫が住んでいた東の対たいも壊れており、姫君の姿はどこにもなかった。

茫然と立ち尽くす男の前に一人の老いた尼が現れた。下働きをしていた女の母親だった。尼は涙ながらに話し始める。

姫君は手紙を待っていたが、届かなかったので見捨てられたと思ったこと。三年後、乳母が亡くなり、仕えていた人たちも次々と去っていったこと。やがて寝

殿や対の家屋が壊れ、物盗りが横行したこと。姫は廊下の隅の小部屋に身を潜めていたこと。尼も京を離れたが、帰ってくると姫君の姿が消えていたこと、等々。それを聞いた男は、当てのない姫君捜しを始める。そして、ある日たまたま立ち寄った朱雀門すざくもん前の建物で、ついに姫君を見つけた。汚れた筵むしろに痩せ細った身を包んで横たわっていたのだ。男は駆け寄り、姫君を強く抱き締めた。自分を抱く男が二度と会えないと思っていた夫であることを知った姫君は、しかしその瞬間、万感の思いに堪え切れず絶命してしまふ。

傷心の男は、愛宕山あたごやまへと向かった。髻もじりを切って出家したのであった。

常陸国 現在の茨城県守 ここでは国を治める地方長官。

東の対 寢殿造りの東側の部屋。

朱雀門 平安京の大内裏の正門で、南に中央大通り(朱雀大路)が羅城門まで続く。時が経つとともに荒廃し、盗賊のすみかになるなど、付近の治安は悪化した。

愛宕山 京都市西北部にある山。京都盆地を囲む山の中でも、比叡山と並んでよく目立っており、修行の山として知られる。髻 髪を頭の頂で束ねた所。また、その髻。

姫君の生涯は、なんと孤独な一生だったことでしょうか！ 切なくてたまりませんね。しかし、最期に姫君は、最高の幸せを感じながら娑婆の人生を終えたとも味わえます。初めて心から自分を受けとめてくれる人に出逢ったのですから……。

文豪 芥川龍之介は、この物語を題材にした小説『六の宮の姫君』で最後に法師を登場させ、お念仏の中で息絶えていったと書いています。人生は思うようにならないという私たちの現実。その根源はどこまでも深いといえますが、それを単に絶望ではなく、どんな人にも希望と喜びがあることを、芥川は弥陀の念仏で表そうとしたのではないのでしょうか。

仏教では、すべてのものは移り変わるといふ意味の「諸行無常」を説きます。この世のものは何ひとつとして本当に頼りにできるものはないとも言えます。親鸞聖人も「よろづのこと、みなもつてさらざることたはごと…」と述懐され、「念仏のみぞまこと」と申されました。『歎異抄』後序)

《男女の悲哀の物語》

幽霊となって夫の帰りを待ち続けた妻

「逢いたいのには逢えなご」

——そんな「愛のすれ違い」に悩む人、あるいは悩んだ人は多いと思います。確かに、愛する人と離ればなれになるのはつらくて切ないものです。しかし、男女間では愛への思いに多少の違いがあるようで、その食い違いはお互いの不安や不信を招きかねません。また不信と疑念が高じると、最悪の場合、憎しみにまで発展してややこしくなるのが男女の仲。人は程度の差こそあれ、愛憎の苦しみから離れることはできないようです。

人の妻、死にて後、旧の夫に会ふ語

(卷二十七・第二十四)

今は昔、京に貧しくてうだつの上がらない若い侍がいた。ある時、国守として任国に下るといふ顔見知りの貴族から「生活の面倒をみてやるから、一緒につい

侍 貴族に仕える雑用係。  
国守 地方の国の長官。任国に下るといふ受領でもある。